

身内の声

中三・荒川 智哉

ある日の満月の夜の事です。悩みを持った武士が池のほとりで一人うずくまっていました。結構前からこの状態なので、始め池の中央で光輝いていた満月は、どんどんと男に近付き、今丁度男を照らし始めました。

男は、体全てが山吹色の光の泡に包まれていく感覚を覚えて、ふいに顔を上げました。すると、目の前は満月があるようにまぶしくなっていて、よく見ると

「神様」

がいるではありませんか。足は雲にかくれていて、大きなつえ、頭は金の輪っかが浮いています。男は驚いて逃げようとしたのですが、体にうまく力が入りません。先に口を開いたのは、神様の方でした。

「私は神である。天から、夜空で光輝く星を鏡のように映し出す池を眺めておったのだが、ほとりですつとうずくまるそなたが心配になった。どうしたのだ？」

男は、いつから夢を見ていたんだと思いましたがおもしろい夢だと感じたので、せっかくだから悩みを言うことにしました。

「私は半年前から、町奉行をしているのですが、中々成果が上げられず困り果てているのです」

「そなたに妻と子はいるのか？」

「はい。でも、自分の事で精一杯で、家に帰る気力がございません」

「そうか。それは気の毒じゃ。ならばこの私が、そなたに心の声が

分かるようになる力をつけてやろう。一ヶ月後、満月の日にまたここに来るのだ。では」

すると、男はまた池のほとりで一人うずくまっていた。男は、変な夢を見たと思い早く家に帰ることにしました。

次の日。男は、昨夜の変な夢をずっと、忘れられずにいました。もう今から取り調べを始めるので、集中したいのに頭は心の声のことでいっぱいでした。

「では、始める。お前は米屋から米を盗んだ疑いがある。やったのか？」

取り調べが始まりました。

「町奉行様、私はやっておりません。人違いにございます」

「犯人を目撃した人物が、お前の顔だったと言っている」

「あのね、私の家をお調べになったでしょ？盗んだ米は見つからなかったんですよ？どうなんですか」

男は、いつもすぐに参考人になめられるのです。それは、男の性格の良さがにじみ出ている為に、参考人に恐れられないことが原因なのでしょう。男は弱気になりました。心の声分かるようになる力を神様からさずかったのではないかと思っていた先程までの自分が、大変馬鹿馬鹿しく思えてきました。次に、何を聞くのかを思い出していたら、

「屋根裏に米をかくしているのは、まだ見つからないよな。緊張するな。がんばれ自分！」

と、参考人の弱気な声が聞こえてくるではありませんか。男は、すぐに参考人の顔をしっかりと見ましたが、誤って口をすべらせてしまったことに動揺しているような表情は一切なく、先程と同じく男

をにらんでいます。横にいる役人たちは、暗い表情を浮かべていて、参考人の弱気な声は聞こえていないようでした。

男は、気付きました。自分にしか、聞こえなかったのは神様がくれた力、

「心の声」

と、いうことです。男は、取り調べをすぐにやめて、役人たちに参考人の家の屋根裏をくまなく調べさせました。すると、本当に盗んだ米が出てきたのです。これには、役人たちは

「さすが町奉行ですよ」

「すばらしいです」

など、賞賛の嵐でございました。そして、参考人もあつけなく

「私がやりました」

と、自供するのです。男は、この取り調べで神様と会ったのは、夢ではなかったんだと確信しました。

それから、男は人の心の声が聞こえる力を存分に発揮して、取り調べを円滑に行い、参考人を次々に自供させることができたのでした。少し昔のように、成果が上げられない駄目な町奉行の姿は、もうどこにもないのです。男があまりにも早く事件を解決するので、役人たちの暗い表情もいつしか、消え失せていました。

一時期、町では男は仕事ができない町奉行という噂がありました。が、次の取り調べでその噂は消え失せて、新しくどんな事件も解決できる町奉行という噂が、町中に広まることになるのです。その事件というのは、殿様が宴会の時に

「毒を飲まされた」

という事件です。この事件は、宴会に出席した二十人以上が参考人で、非常に取り調べが難しく、いくら最近調子が良い男にも解決で

きないと思われました。

しかし、男はどこから聞こえてくるか分からない心の声をたよりに取り調べを進めていると、一人の奉行人に目が留まりました。

「お前が殿に毒を飲ませたのか？」

「いいえ。私は確かに殿様に酒をつぎましたが、毒などは決してありません」

そして、参考人が話し終わるといつもと同じく、心の声が聞こえてきました。

「実は、俺が毒を飲ませたんだよ」

これに男は

「そうか。実は、お前がやったんだな」

と、言いました。奉行人は、それにかすかな反応をしましたが、すぐに否定の言葉をむだに多く話します。それでも、心の声は何度も何度も漏れてきますので、男は

「奉行はつらかったであろう」

「殿に何度も怒られたんだな」

「暴力もあつたんだな。この私が、お前の罪をちと軽くしてやろう」などと言うと、たちまち奉行人は

「実は、私がやりました」

と、白状するのです。役人たちは、今や男がたのもしくて仕方がありませんでした。男は、たいそう嬉しかったはずです。この事件解決で、男の偉業は

「瓦版」

にのり、人々は男に感心して、少し前よりも事件の数が少なくなつたように感じます。

そして、一ヶ月後の満月の夜。男は、同じく池のほとりで一人うずくまっています。この前よりも、池の中央で光輝いている満月はせかせかと近付いてきて、今丁度男を照らし始めました。すると、男はまた自分の体が光の泡に包まれたように感じて、はっと顔を上げると

「久しぶりだな」

そこには、また神様がいるではありませんか。神様は満面の笑みを浮かべながら、男を見つめています。

「どうじゃった？心の声が聞こえて、さぞかし良かっただろう」

男は、きっと神様にお礼を言って、このすばらしい力を生涯使わせて欲しいとでも言うのではないのでしょうか？しかし、男の口から出た言葉は、真逆なものでした。

「神様、心の声分かる力をどうか私から解放してくれませんか？」

神様は、大変驚きになりましたが、つえがあったおかげで、転びにはなりませんでした。

「はてな？それは、どうしてだ」

「心の声が聞こえるようになって、私は皆から駄目な町奉行だと、思われなくなりました。最初に円滑に事件を解決できた時は、とても嬉しかったです」

「いいぞ、言いなさい」

「でも、町を歩いていると、仲良しに見える人がお互い心の中で暴言を言い合っているんです」

「そうか…。それは恐ろしいな」

「それに何より、妻と子に申しわけない。夜遅く帰っても、笑顔で迎えてくれるのですが、心の中ではもっと一緒にいたいと言っているのです。それで私、苦しくなっています」

神様はしばらく、黙り込みました。

「私が悪かった。そなたを解放しよう。また一ヶ月後の満月の夜にそなたに会いたい。では」

すると、男はまた池のほとりで一人うずくまっていました。一瞬、強い風が男に向かって吹いたかと思うと

「取り調べの時だけは、心の声が聞こえるようにしておいた。そなたも、実は心の中で望んでいただろう？」

と、神様の声だけが聞こえてきました。男は、満面の笑みを浮かべました。
